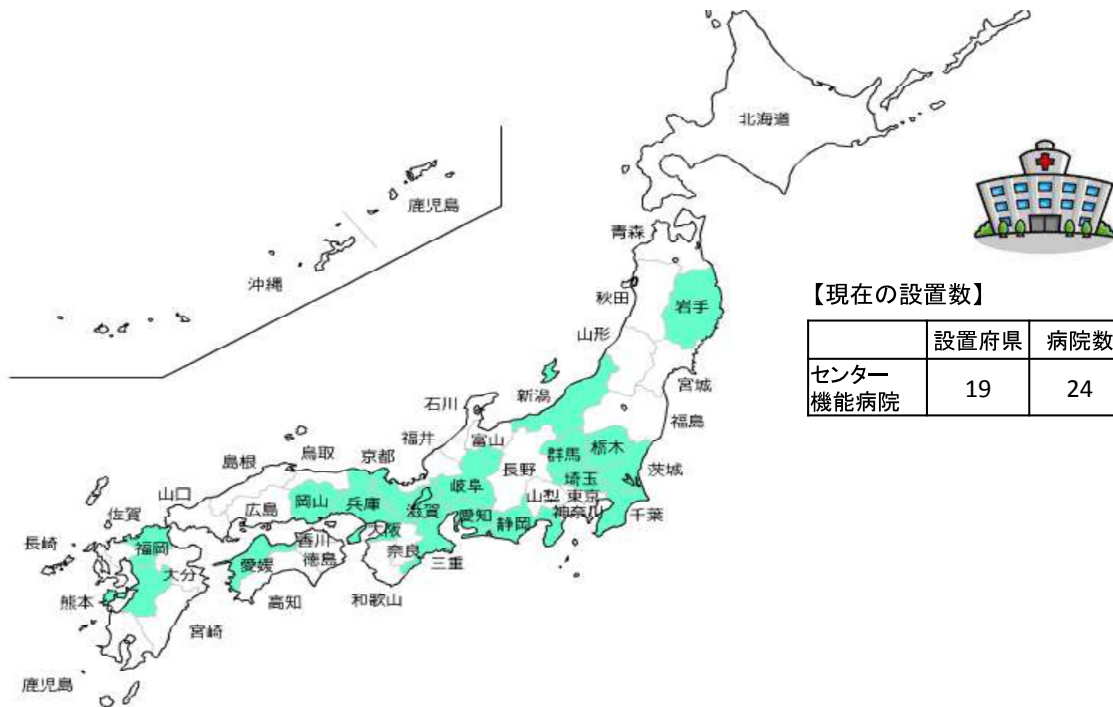


予防接種センター機能の設置状況（25年7月時点）

※予定含む



風しんの流行への対応について（特定感染症予防指針）

背景・趣旨

- 風しんは、かつては国民の多くが自然に感染する疾患であり、5～6年ごとに全国的に大きな流行を繰り返していたが、予防接種の進展とともに、流行は小規模化し、平成16年（約39,000人の推計患者）以降、流行は見られていなかった。
- 平成24年より、首都圏や関西地方などの都市部において、20～40代の成人男性を中心に患者数が増加し、平成25年は14,357例の患者、32例の先天性風しん症候群が報告されている（一週間当たりの報告数は5月をピークに減少し、8月には平成24年並みとなった）。
- 患者は定期予防接種の機会がなかった現在35～51歳の男性、予防接種の実施率が低かった26～34歳の男女に多い。
- 平成24年5月以降、定期接種対象者への積極的な接種勧奨、妊婦への感染を抑制するための任意接種に関する情報提供、感染した妊婦に対する情報提供の依頼等の通知を发出。
- 政府広報、厚生労働省HP、メールマガジン、ポスター等での普及啓発・注意喚起。
- 関係団体に要請して、職場、新婚夫婦等、対象を絞ったリーフレットの作成・周知、夜間休日の接種機会の確保、妊娠中の感染症予防対策の情報提供等を実施。
- 平成25年4月以降、任意接種者数が急増しワクチンが不足する恐れが生じたものの、関係者の協力や接種者数の減少により、ワクチンの全国的な不足は回避できている。
- 流行は収まりつつあるが、中長期的視点に立って風しん対策を進めるため、風しんに関する小委員会を設置し、平成26年1月に「風しんに関する特定感染症予防指針（案）」を取りまとめた。

特定感染症予防指針

- 平成26年2月に、「風しんに関する特定感染症予防指針（案）」について、パブリックコメントを実施。
- 平成26年3月中の指針の告示、4月からの施行を予定している。

風しんの感染予防及びまん延防止対策の強化

平成25年度補正予算:12億円

1. 背景

平成25年の風しんの流行により1月～12月までに14,300人以上の風しん患者と32人の先天性風しん症候群(※)患者が報告され、平成20年の全数把握調査の開始以降、最大の流行となっている。また、国際社会ではWHOの主導による風しん排除計画が進められている。

※ 風しんウイルスの胎内感染によって先天異常を起こす感染症

2. 目的

今回の流行の中心は20代～40代の成人であり、この世代の約8～9割は既に抗体を保有している。このため、真に予防接種が必要である者を抽出するための抗体検査や情報提供を行うことにより、効果的な予防接種を実施し、風しんの感染予防やまん延防止を図る。

3. 内容

①検査機会の確保(12億円)

主として先天性風しん症候群の予防のために、予防接種が必要である風しん感受性者を効率的に抽出するための抗体検査を医療機関等で実施する。

○対象者:妊娠を希望する女性 ※抗体検査歴、接種歴、既応歴のある者を除く

290万人(未婚産婦)×1/8(接種歴、既応歴のない者)=約36万人

○総事業費:24億円(うち国費12億円) ※単価6,600円

○実施主体:都道府県、政令市、特別区

○補助率:1/2

②普及啓発活動の強化(0.2億円)

抗体検査や予防接種等について必要な情報提供を行う。

予防接種(任意接種)の実施

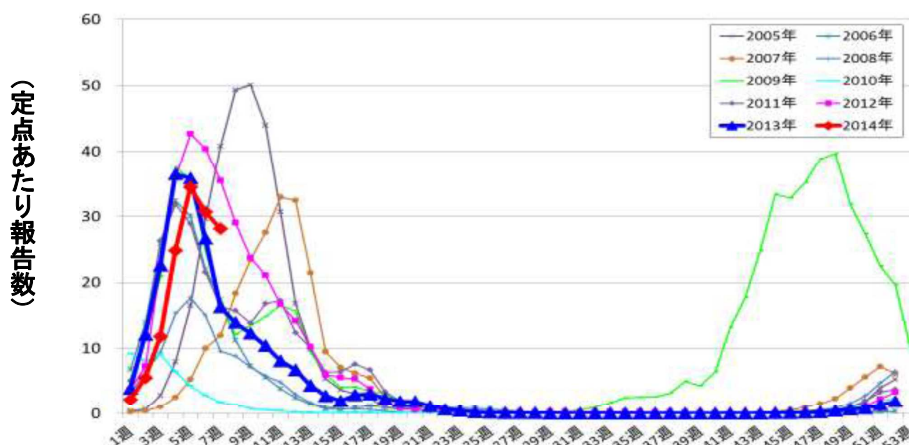
風しん患者全体の減少につなげる。

インフルエンザ対策について

現状

- インフルエンザの流行入り:平成25年12月16日の週(第51週)
- ウイルスの検出報告状況:H1N1が大半を占める(平成26年2月時点)

インフルエンザ定点あたり報告数推移グラフ(過去10年)



▼インフルエンザ予防啓発ポスター



考)平成25年度今冬のインフルエンザ総合対策について
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/influenza/index.html>

今後の対応

- 季節性インフルエンザには、A/H1N1亜型(平成21年に流行した新型インフルエンザと同じもの)、A/H3N2亜型(いわゆる香港型)、B型の3つの型があり、いずれも流行の可能性があります。流行しやすい年齢層は亜型によって多少異なりますが、今年も、全ての年齢の方がインフルエンザに注意する必要があります。